Ⅳ 子どもの立場に立った褒め方・叱り方

次も頑張ってみようかな

一人一人を認めてから、褒める、叱るという姿勢が子どもの変容を促す。

- ささいなことでも教師から褒められたことは、一生忘れないことがあります。また、心から叱ってくれたことが、後の行動によい影響を及ぼすこともあります。
- 褒めて子どもを伸ばすこと、叱って行いを改善させることは、教師の重要な仕事です。そのためにも、子どもの言動等を適切に価値付ける責任が教師にはあります。
- 子どものために叱りますが、いつも叱られてばかりでは、自信を失って伸び伸びと行動することができなくなります。また、褒めてばかりでは、効果がない場合もあります。
- 褒める際、叱る際の教師の構えとして重要なのが、一人一人の子どもを認めるという姿勢です。認めてくれていると感じた子どもたちは、前向きに自分の行動を改善しようとしていくことでしょう。

褒める場面を見逃さずに褒めきる。

褒める場面は、意識していないと見逃してしまう場合があります。よい行いをしたとき、その場で褒めきることが効果的です。その際には、教師が褒めることの基準を明確にもっておく必要があります。以下のような場面を教師は意識しておき、その場で効果的に褒めるようにしましょう。

○ 努力する姿を認める

「できる」「できない」といった結果よりも、よりよくしようとしているその過程に着目しましょう。たとえできなくても、それに向けて取り組んでいる過程を認めることは、子どもを大きく勇気付けます。

○ 小さな言動を認める

目の前で良い行いをしたときは、褒めることができますが、見ていないところでしているよい行いを褒めることは、意識していないとできません。小さな言動を見逃さないようにしましょう。

○　集団に対して認める

時には、学級やグループなど集団を褒める方が効果的な場面もあります。集団を褒めることは、子どもが所属している集団に対する肯定的な意識を芽生えさせることにもつながります。また、みんなの前で褒められることは自信につながりますが、みんなの前で褒められたり、大げさに褒められたりすることが苦手な子どももいます。名前を出さずに褒めたり、学級やグループなど集団のこととして褒めたりするといった配慮も必要です。

子どもなりの理由を受け止めた上で、叱られた理由を納得させる。

子どもの言動には、全て理由があります。ある言動の背景には、何日も前のことや、家庭での出来事があることもあります。「分かっていてもできない」時もあります。その際には、まず、子どもなりの「今回の言動の理由」をたずね、言わせる中で考えさせ、受け止めた上で、諭すように叱ったり、絶対に許されないということを伝えるために、厳しく叱ったりすることが大切です。

叱る目的は、子どもたちをよりよい方向に導くことです。そのためには、指導に一貫性をもち、子どもの人間性を否定するのではなく、その言動を捉え「子どもの成長を促すため」という意識を持って、子どもが叱られた理由を納得し、変わりたいと思えるようにすることが不可欠です。

例えば、次のような行いをしたときに、先生は厳しく叱ることを示しておくことで、日頃から子どもが意識することができます。

先生が、厳しく叱る三つのこと（例）
- 友達を馬鹿にしたとき
- いじめや仲間外れをしたとき
- 命に関わる危険な行いをしたとき

ワンポイント！

逃げ道を残すことも大切

悪いことをしたと自分で分かっている子どもの場合、次々と責め立てて追い詰めると、最後には感情で返してくるようになります。「いつもは〇〇ができるのに、今日はどうしたの」や、「次はこのようなことがないことを信じているよ」などのように、反省を促すと同時に、逃げ道を残したり、次の取組への期待を伝えたりすることを意識して指導することが大切です。